

私の一冊

門脇厚司

「^{いま}現在の子どもがわかる本」

門脇厚司・久富善之編著（学事出版）

[中央 371.4-Ka14]



最近、新聞を開くと、ほとんど毎日のように、

高校生が「人を殺してみたくて」といって通りがかりの家に入り込み老女を殺したとか、中学生がクラスメイトを脅して数千万円のお金を巻き上げ豪遊していたとか、小学生が覚せい剤を買うため強盗をしたといったニュースが飛び込んできます。テレビのニュースやワイドショーなどをみても同じです。中学生が先生に注意されてキレ、ナイフで刺し殺したとか、高校生の男女が遊ぶ金欲しさに共謀し、タクシーの運転手を殺したといった事件が目には飛び込んできます。

こういうニュースや事件を毎日のように目にしたり耳にしたりしていると、大人たちは「一体、最近のコドモやワカモノはどうなっているんだ？」と訝ることになります。また、小学生、中学生、高校生をわが子にもつ親たちや、彼らの教

育に携っている先生たちは、「ウチの子は大丈夫だろうか?」「わがクラスの子たちも、そのうち何かやらかすのでは?」と不安に駆られることになります。「わが国の子どもたちは、本当に変わったのだろうか。」「変わったとしたら、どこがどう変わったのだろうか。」

日本教育学会という学会は、日本の教育学者たちがお互いの研究を高めるために情報交換したり共同研究したりすることを目的に組織されている団体で、現在3,000人ほどの会員がいます。教育学者が教育に関する事柄の専門家だとしたら、当然、先のような大人の疑問や親や先生たちの不安に応える責任があります。その責任を果たそうと、学会では5年前から研究グループを組織し、「変化する社会と子どもの異変」というテーマで研究を続けてきました。その成果を一冊の本にしたのが本書です。本のタイトルは「現在(いま)の子どもがわかる本」です。本のタイトルは内容を表します。「この本を読んで、最近の子どものことがよく分かった。」という感想を多くいただいています。子どもが分からないと思っている人には是非一読してほしいと思います。併せて、私の単著である『子どもの社会力』(岩波新書、660円)も読んでほしいと思います。そうすれば、あなたも“子ども通”になれること請け合いです。

(かどわき・あつし 教育学系教授)

中内啓光

「免疫学早わかり講座」

—基本から病態までのやり直し免疫学!—

中内啓光著(羊土社) [医学 491.8-N43]



エイズの出現以来、免疫という言葉がしばしば新聞をにぎわすようになった。とくに最近では臓器移植の際の拒絶反応や花粉症アレルギーなど、免疫が話題になる機会が増えている。医学部在学中から免疫学に興味を持ち、研究を続けてきた者として喜ぶべきことなのかもしれない。ところが残念なことに免疫に関する最近の話題の多くは、人間にとって不都合な免疫反応である。そのため、免疫があたかも悪者のように考えられてしまっている。しかし実際には免疫の語源が「疫」病を「免」れることに由来するように、免疫系は人間をあらゆる感染症から守る極めて大事な仕組みなのである。他人からの移植臓器も自分の体ではないのだから、免疫系がこれを排除しようというのは当然のことである。また、花粉症にしても、免疫系は花粉という非自己の物質を体から排除するという、いわば与えられた業務を忠実に遂行しているにすぎないのである。それでは何百万以上あるだろうと考えられる外からの侵入者を免疫系はどのようにして認識し、自分と区別し、攻撃して排除するのか? この実にユニークで巧妙な免疫系の仕組みを明らかにしようというのが免疫学である。この仕組みを理解し、コントロールすることが可能になれば拒絶反応や花粉症を治療することも容易なはずである。

本書では免疫学の基本的な仕組みがどのようにして明らかにされ、また病気とどのようにかかわっているかをわかりやすく紹介することを第一の目的としている。もともとは医学生やレジデントを対象とした雑誌に連載したものであるが、単行本化にあたり一般の読者にも分かり易いように図や説明に手を加えてある。本書が皆さんの「免疫学に対するアレルギー」の特効薬となれば良いと願っている。

(なかうち・ひろみつ 基礎医学系教授)